妻と女の間 下

瀬戸内晴美

毎日新聞社

妻と女の間　下

瀬戸内晴美

定価一二〇〇円

昭和四十四年六月二十五日　初版
昭和五十年四月一日　15版

編集人　桑原隆次郎

発行人　伊奈一男

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇三　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町

印刷　図書印刷
製本　大口製本

0093—401006—7904

妻と女の間　下　目次

落葉路――七
短日――二九
赤い絹笠――五〇
白菊――七一
風もないのに――九二
昼月――一二五
朝の嘘――一三七
淡雪――一五七
茜雲――一七九
濁流――二〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

初霞 ―― 二三一
草枕 ―― 二四一
断崖 ―― 二六一
祈願 ―― 二八三
鏡と鏡 ―― 三〇一
裏窓 ―― 三三三
迷い鳩 ―― 三四七
十三夜 ―― 三六八
笹舟 ―― 三八九
陽の道 ―― 四一〇

装幀　栃折久美子

妻と女の間　下

落葉路

十一月の日記を読みかえしながら、英子は軽いため息を洩らした。

日記の日付のところに、英子にだけわかるさまざまな記号が記してある。

Dとあるのはデートの意味で、政之が来た日のしるし。Tとあるのは電話の意味で、政之から電話のあった日のしるし、あとは生理の覚書の小さな点。その点は、これまで意識することもないほど正確だったのが、政之とこういう関係に入ってから、何ヵ月か、びっくりするほど変調をきたした。その都度、神経をつかって、もしやと心配させられたせいだった。しかし、それも、こういう生活に馴れるにつれ、いつのまにか以前の、いたって正確な体調に整ってきている。

自分にだけ読みとれるその小さな点のしるしを見つめていると、英子は女というものの哀しさに心が沈みこんでいくようだった。

政之によって自分の心はいうまでもなく、軀(からだ)の内側からつくり変えられていることが、いやというほど思い知らされるのだった。

男はつくづく得だと思う。万一、自分が妊(みこも)った時のことを思うと、英子は空恐ろしさに軀がちぢむようだった。

Dというしるしを数えてみる。今月はわずか五日しかしるしがついていない。月のはじめに、二

日泊まり、あと、月半ばに一晩だけ。そうして四日前と五日前に二晩つづけて泊まっている。

政之は、帰る時はいつでも、

「またすぐ来るよ」

と必ずいう。

はじめはそのことばを信じて、

「ほんとう？　いつ？」

と勢いこんで訊いていた。

「そうだね、出来るだけ早く来るよ。そうだなあ、四、五日したら……日帰りでもいいよね。顔だけ見に来る」

そんなことばは、みんな別れの時の気やすめと空手形でしかなかったことは、たちまち思い知らされてしまった。

結局、あてにした訪れはいつでも期待を裏ぎられ、もうあきらめてしまったような時に、いきなり、

「明日行くよ」

とか、

「今日、夜、着く」

とかいってくるのだった。

来た時は、まるで一週間も居つづけそうなことをいっておきながら、長くて三日か四日で、そそくさと、突然帰っていってしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

政之の忙しさは、秘書をしていて充分識っているし、上京してきた政之がびっしり時間にきざまれたスケジュールを持っていることも識っている。けれども、やはり、政之が自分といてくれる時間が、あまりに少ないことに、英子は次第にこだわらずにはいられなくなってきていた。

「だって、考えてごらんよ。ぼくが、東京で何をしている？　仕事のない時は、一分も早くここへ来ているじゃないか」

「だって、バーへだっていらっしゃってるわ」

「それだって仕事じゃないか。ひとりでなんか、もう行ってやしないよ。全く不自由になったもんだ。まるで女房が二人出来たようじゃないか」

あっけにとられている英子に、政之は、

「こんなに不便になるとは思わなかったよ。女房の方はまだだましやすいけれど……というのは、大体、女房族ってのは自らだまされたいと願望しているからね。自分から、目をつぶりたがっているんだ。ところが、恋人とか情婦とか名のつく方は、自分と出来ちゃう間に、男がどうやって女房をだまし、目をごまかすかということをつぶさに見て来ている。だから、男の手口をいろいろ承知しているわけだ。こういうのは困るよ、全く」

という。英子は思わず、政之の身勝手な言い分にふきだしてしまいながらも、

「その上、私は秘書時代、社長の社用の中身も存じあげておりますからね」

と、嫌味のひとつもいってやりたくなる。

男が、二言めには仕事といっても、必ずしも中身は仕事でない場合も多いのを、英子は思い出す

のだった。
それでも政之は、最初、英子を東京に囲った頃は、一ヵ月に七、八回も上京してきたことがつづいた。朝発って、夜帰っていくこともあったが、そんな日は所謂「仕事」はなしで時間のあるだけ英子とアパートにこもっていた。
「どこへ行ったことになっているんですか？」
英子が好奇心から訊くと、
「今日は神戸だ」
とか、
「今日は京都にいる筈だよ」
とか、すましていう。
大阪に用のあった日は、空港から電話をかけてよこし、二時間後にはもうアパートについていることさえあった。
それも、いつのまにか、一度減り、二度減って、今では、月に四、五回、時によっては三回しか上京しないこともある。
つい恨みっぽくなる英子に、
「誰だってはじめは珍しいし、熱中するよ。でも考えてごらん。そんなはじめと同様の熱度がつづいたら、半年もすれば、あきあきしてしまうよ。すべて交わりは淡く長くという方がいいじゃないか」

など、平気で答える。

もう自分は飽かれはじめているのかと英子は心細くならずにはいられない。

ある時、英子が買い忘れたサラダオイルを買い足しにいって帰ってくると、政之がソファーにねころがって読んでいたものをあわててかくした。

赤い皮表紙のノートはすぐ政之の軀の下にしかれたが、一瞬に、英子はそれを認めて、悲鳴をあげて、政之の手からそれを奪いかえした。

「ひどいひと」

はあはあ、息を弾ませながら、英子がとりかえした日記を抱きしめて睨むと、政之は照れて、

「いいじゃないか。ぼくらの間に秘密はない筈だろ？　それとも何かい？　英子はぼくに秘密を持ちたいのかい？」

と、かえってからんでくる。

「いいがかりですわ、そんなの」

その夜、ベッドで、政之の肩のくぼみに頭を預けて、まだ平常にもどらない息をととのえようと、深い呼吸をつづけている英子の、髪の中に指をさしいれてかき乱しながら、政之がふっといった。

「あれは何のしるしだい？」

「え？」

「ほら、日記にDとかTとか、あやしげな記号が書いてあっただろ？　点々はおおよその見当がつ

いたけれど」
英子は恥ずかしさをかくすため、いっそう政之の肩に頭を埋めこんでしまいたいようなのめり方で顔を押しつけながら、
「知らない」
とすねた。
「言えないんだな。わかった。若い男と逢うしるしだろう」
「あきれた。よくごらんになるといいわ。あれくらいしか、あなたは来ていないっていうことなのよ」
「うまくこじつけたな」
「まあ、じゃ、持ってきます。先月も、先々月も、あなたの手帳とひきあわせてごらんになるといいわ。第一、日記の中身を読めば、Dの日にあなたがいらしたこともわかるし、Tの日にお電話下さったことがわかるじゃありませんか」
むきになる英子の真正直さに充分満足しながら、政之はわざと、面白がってからかってみる。
「だって……だんだん、お逢い出来る回数は減っていくし、私の方は待つしかないんですもの……」
英子はついロ調がぐちっぽくなってくる。
「ばかだなあ。毎日逢わないから、ぼくたち、いつも新鮮でいられるんじゃないか。毎日いっしょに暮らしたり、毎晩いつでも寝られる仲だったら、とてもこんなに逢いたがって情熱が湧くってことないよ。それとも、英子はやっぱり、ぼくといっしょに暮らしたいの？」

政之の問いはどこか猫が鼠をなぶっているような感じがあった。

「そりゃ、女ですもの　愛するってことは、相手と一分てもたくさんいっしょにいたいって気持じゃないでしょうか？」

「そうかなあ。きみはまだ結婚生活も同棲生活もしたことがないから、そんなこというんだよ。ぼくの考えじゃ、世の中で一番惚れてる相手とは、決していっしょに暮らさないのが理想だと思うね」

「うまいことおっしゃって」

英子は政之の勝手な言い分に苦笑しながら、それでも面と向かっている時は、どんなこじつけも愉しく聞きわけられる。

「あんなしるしはやめちゃった方がいいよ。考えてごらん。回数にしたら、何だけれど、ぼくが英子に逢っている時間の質を考えてごらんよ。量より質だよ。こんな密度の濃い時間は一日が三日にも四日にも値するよ」

「嘘ー」

英子は政之の腕を思いきりつねりながらいった。

「食べだめと寝だめが出来ないように、逢いだめも出来ないわ」

一度、英子の日記を読んで以来、政之は来る度、英子の日記をのぞきたがる。自分の来ない間に英子がどんな行動をとっているか、さも知りたがるふうにしてみせるのも、政之の英子へのサービスのひとつだった。

どうせ、京都にいる時は、自分の生活を極力享楽していて、英子のことなど、ほとんど考えもしていないくせに……と、英子は大方の察しはつけていながら、やはり、自分のことを嫉いてみせる政之のジェスチュアに、いくぶん心を慰められている。

とはいうものの、こんなことをしていて、将来、どうなるのだろうという不安が日増しに強くなってもいく。

好きになってしまったのだから、結婚という形式をとらないでも、政之と結ばれているじゃないかと、自分にいってきかせている。そのくせ、愛が深まるにつれ、政之を独占していない事実に平静でいられなくなってくる。

英文速記や、フランス語を習いはじめたのも、東京で無為に、ひたすら政之を待つだけの暮らしをしていると、自分の内部から何かが崩れ、融け、腐っていくような不安を感じたからであった。

こんな関係になってから、これまで識っていたつもりの政之の、ほんの一部しか自分は識っていなかったと、思い知らされることが多かった。

政之が、この部屋から京都の優子にむかって、まるでホテルのロビーや、料理屋の廊下からでもかけているように、平気で電話をしていたりするのを見、聞くと、こんなことで、結構だまされている優子がおめでたいと思うより先に、この調子でなら、自分だって、どんなだまされ方をしないでもないと不安になってくる。

不安になるといえば、今のような状態は、極めて不安なことばかりで、将来について、政之から何の保証をされているわけでもなく、いつまでつづけられる仲だという確証もない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com